

富山妙子の画家人生と作品世界

— 〈炭鉱〉を軸として、ポストコロニアリズムの視点から—

研究代表者：真鍋祐子（東京大学東洋文化研究所・教授）

共同研究者：金子毅（聖学院大学政治経済学部・准教授）

1. はじめに

画家・富山妙子は1921年に神戸に生まれ、英国ダンロップ社に勤務する父の転勤で、少女時代を大連、ハルピンで過ごした。後年、彼女は創氏改名を強いられながらも朝鮮名を通じた女学校時代の級友や、満洲から朝鮮半島を縦断する汽車旅で遭遇した日本憲兵に連行される朝鮮人青年の姿などを、たびたび回想している（Jennison, 2003: 188）。当時の日本人が朝鮮人や中国人に行なっていたことは、父の会社でイギリス人が日本人社員にとっての態度とそっくりだったという。さらに、富山は車窓から目撃した植民地支配の現状と土地の荒廃に衝撃を受けるが、敗戦後も、朝鮮戦争とその後の長期にわたる韓国の軍事独裁政治が、彼女を苛む一つのイメージとなって沈潜し続けた（Jennison, 1996: 87）。

1950年代、富山はシングルマザーとして2人の子どもを育てるため、絵本の挿絵をなりわいとする一方、炭鉱に入り、東京に送るルポ記事の原稿料を生計の足しにした。この時期に描いた炭鉱の絵を、彼女は「ルポルタージュとしての絵画」と位置づける。ところが1950年代末になると、エネルギー革命ともなう石炭不況と相次ぐ落盤事故により閉山が相次ぎ、多くの炭鉱夫たちが山を去った。すると彼女も1961年には炭鉱に見切りをつけ、移民する離職者たちを追ってブラジルに渡り、さらにチリ、メキシコを旅する。ブラジルではヨーロッパからの亡命知識人たちと交流し、その伝手で1962年10月半ば、キューバ危機直前のキューバにも渡っている。メキシコやキューバでアメリカ覇権主義にあらがう対抗文化運動としての、西洋中心の美術に与しない第三世界の芸術運動に遭遇した富山は、メキシコの壁画運動、キューバの版画運動にインスパイアされ、後にその手法を自身が韓国民民主化運動を描く際に導入し、著書『解放の美学』（1979年）でも紹介した。1980年の光州事件をへて、富山の作品や著作は非合法に韓国に受容され、勃興しつつあった韓国民衆美術を力づけ、影響を与えたという。

富山は1970年11月に初めて韓国を訪れ、ハルピン女学校時代の朝鮮人の旧友たちと再会し、その間の植民地支配、分断、戦争で狂わされたそれぞれの人生、心の痛みを分かち合う経験をする。またこの時、妓生観光をする日本男性たちの姿を目の当たりにし、「現在もつづいている植民地支配の影（支配—被支配の構造）に気付いた」という（徐, 2016: 52）。帰国後、富山はルポ「傷ついた山河」（1971年）を発表する。これを読んだある読者から、所謂「在日同胞留学生間諜団事件」（1975年）で囚われていた徐勝・徐俊植兄弟への支援を依頼される。ちょうどその頃、金芝河の詩に共鳴していた

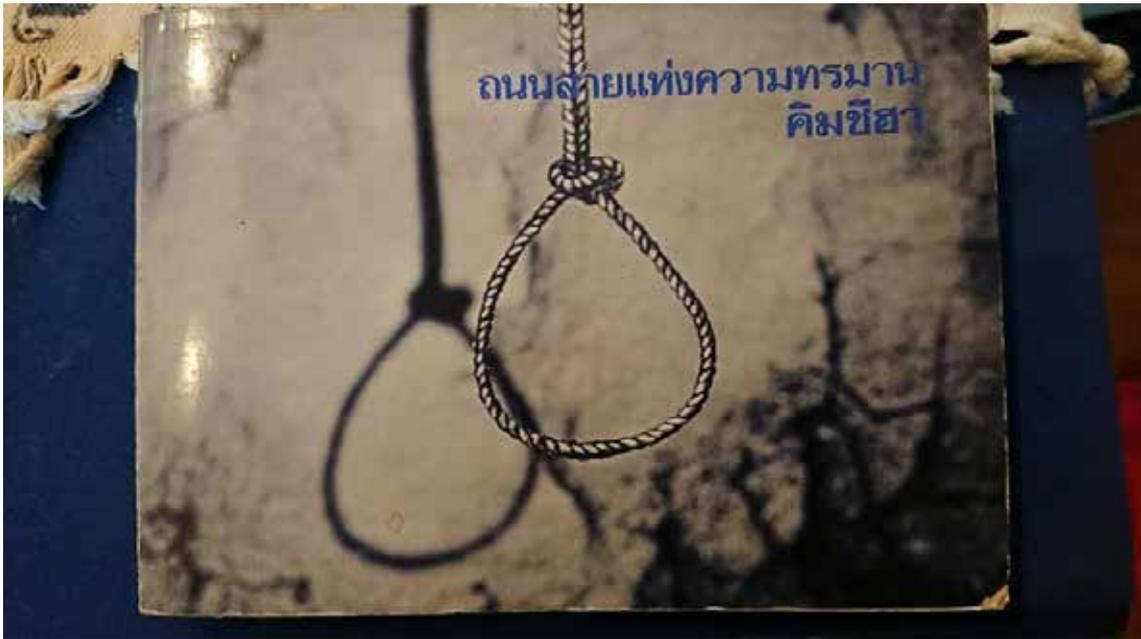
富山は、「時代的要請に反応していくなかで、韓国の政治状況にのめり込んでいった」という（徐、2016：53）。ハルピン時代の記憶、満洲から朝鮮半島を縦断する汽車旅の記憶が、「植民地支配の影」として、分断後を生きる旧友たちのその後の人生と心の痛み、日本男性の売春観光とともに、戦後も続く日本社会の在日朝鮮人差別、分断による危機を理由に正当化された抑圧と暴力、軍事文化といった「分断暴力」、そこに起因する在日朝鮮人青年や抵抗詩人の受難といった現実と、リアルに像を結んだのである。

富山はこの経験によって「日韓関係が他人事ではなく、私自身のテーマとなった」、「自分の存在をこめて語れるものになった」と語る（富山・真鍋、2010：6）。また1970年代韓国との出会いは、帝国主義時代の世界史の中に満洲を原点とした自分史を位置づけることで、新たな歴史の見方と出会い直す契機ともなった。それは「大日本帝国の子どもとして、世界史を肉体化した」ということである（菊地、2006：200-201）。

1980年代の前半、富山は筑豊炭鉱での朝鮮人強制連行を主題とする「はじけ鳳仙花一わが筑豊・わが朝鮮」を発表するが、1950年代における炭鉱との関係を「見合い結婚」にたとえるなら1980年代のそれは「恋愛結婚」だと述べている（富山・真鍋、2010：5）。それは韓国との出会い直しを軸とした「世界史の肉体化」をへて、「アイデンティティを韓国に移した」（富山・真鍋、2010：9）と、彼女自身が意味づける重大な転機となったからだ。

富山は金芝河の詩に寄せた画集の刊行により、1978年から韓国への入国を禁じられる。その一方で、1980年代は光州事件、朝鮮人強制連行、慰安婦、さらにタイに取材した日本への出稼ぎ少女（じゃばゆき）をテーマとする作品を精力的に制作・発表した。西洋画中心の画壇はこれを「政治的」として受け入れず、日米韓の同盟関係に忖度したマスコミも自主規制を敷き、富山の出演番組をお蔵入りにしてしまう。そこで、彼女は音楽家の高橋悠治をはじめとするさまざまなジャンルの文化人・知識人らと協働して、作品をスライドや映画という複製可能なメディアに編集し直し、各地で巡回上映を行なうという独自のスタイルを編み出した。富山作品の「越境」には、ドイツの社会学者で女性運動家の Ilse Lenz、同じく女性運動家でキリスト者の韓明淑（盧武鉉政権時の首相）など、志を共有した媒介者がおり、ヨーロッパやアメリカで富山の画業を広く紹介した。その結果、富山の作品世界はキリスト教や人権運動の諸団体を介してグローバルに拡散され、やがて日本、ドイツ、アメリカなどを結ぶトランスナショナル連帯を通じて韓国民主化運動を励まし、また非公式にはタイやフィリピンの民主化運動をも支えることになる（図1）。

18歳の富山がハルピンから東京に移った1939年から世界各地を旅した1970年代までを画家自らが越境した時代とすれば、1980年代以降は、韓国にアイデンティティを移して精力的に作品を発表しながら、同時にこれらの作品が志を同じくする他者たちの手で越境させられた時代と位置づけられる。



(図1) タイ語に翻訳され地下出版された詩画集『深夜』

2. 富山妙子が描く二つの〈炭鉱〉

本研究で取り上げるのは〈炭鉱〉にまつわる富山の作品と著作、そして彼女自身の足跡である。1950年代に炭鉱を描いた富山は、1960年代のブラジルに炭鉱離職者を追い、ラテンアメリカの国々を旅した。また1970年代軍事独裁政権下での韓国訪問を経て、1984年にリトグラフと油彩画からなるシリーズ作品「はじけ鳳仙花—わが筑豊・わが朝鮮」を発表する。同年には土本典昭監督のもとで、同名の映画（16ミリ・カラー48分、幻燈社）も制作されている。

映画「はじけ鳳仙花—わが筑豊・わが朝鮮」のチラシに、「天駆ける巫女と死霊」と題した富山の文章が載っている。

「炭鉱をテーマにしてわたくしは十年間ほど絵を描いてきた。しかしエネルギー源が石炭から石油へと変わり、炭鉱はつぎつぎに閉山しボタ山もくずされてしまった。

1960年代のはじめ、わたくしは飯塚の近くでふしぎな世界に出会った。それは六世紀ころの装飾古墳、王塚古墳だった。この発見は日中戦争がはじまってまもない1934年（昭9）¹⁾、このあたりを掘っていた炭鉱が坑内の整備中に見つけたものだという。

北九州には大陸との交流を物語る高句麗様式の装飾古墳がいくつかある。黒い炭層と、王塚古墳でみた、丹の朱に彩られた装飾古墳とのぶつかりあいが、わたくしのこれらの絵の発想のもとになっている。

また筑豊炭田には朝鮮人労働者の苦渋の歴史が刻まれていた。この地底には戦争中の朝鮮人強制連行で連れてこられ、死んだ坑夫たちの骨も埋まっていることだろう。

長い歳月がたち、骨をひろう人もなく置き去られ、闇にうもれた死者たちを呼び出し、その深い孤独と悲しみ、恨の声をきこう。そのために死者を呼び出せる巫女の力を借りなければならない。」

既述のように「炭鉱をテーマにしてわたくしは十年間ほど絵を描いてきた」という1960年代初めまでの富山は、「ルポルタージュとしての絵画」として炭鉱を対象化したまでであり、本人が喩えて言うように炭鉱との関係は「見合い結婚」のようなものだった。しかし1984年にこの文章を記したとき、すでにラテンアメリカと韓国への旅を終えていた富山は「大日本帝国の子どもとして」の自身の生活史を内省し、日本の植民地主義を相対化する視座を得ていた。このように新たな作品の着想をもたらした王塚古墳の発見が満州事変・上海事変からまもない1934年、付近を掘削していた炭鉱会社によるものだった点にも、意味が見出される。

王塚古墳発見に先立つ上海事変（1932年）では3人の工兵による自爆死がセンセーショナルに取り上げられ、「爆弾三勇士」として美談化された。この語りは軍人だけでなく、むしろ社会の周縁におかれた肉体労働者たちに広く喧伝されたという。実際、「爆弾三勇士」となった工兵はいずれも赤貧洗うような暮らしをしてきた者たちで、そのうち一人は坑夫だったという。同時期、きたるべき総力戦に備えて工場では「産業戦士」という称号がもてはやされたが、それらの軍需工場を下支えする炭鉱でも、燃料となる石炭増産の需要に応えるべく、「全炭鉱総突撃」というスローガンのもと、同様に「鶴嘴戦士」「石炭戦士」が称揚されるようになっていた（金子、2003：93）。

王塚古墳は、日本が大陸侵略を本格化させた時代に、植民地主義的な文脈の中で、偶発的に発見・発掘されたのである。そこが華麗に装飾された侵略者・支配者の世界とこれと表裏をなす侵略された側の、さらに1930年代中国の阿鼻叫喚の空間とすれば、それにぶつかり合う炭層は総力戦勝利のために掘り進められた地底の阿鼻叫喚と、侵略者が最初に掠奪した朝鮮から連行された坑夫たちの無念の死を表象する。

このように富山妙子の〈炭鉱〉には1950年代から1960年代初めにかけて描かれた文字通りの炭鉱と、ラテンアメリカと韓国への旅をへることで、「自分の存在をこめて語れるものになった」内なる植民地主義の表象としての炭鉱があるのである。ここではさしあたり、前者を「ルポルタージュとしての炭鉱」、後者を「植民地主義の表象としての炭鉱」としておく。なお「ルポルタージュとしての炭鉱」には、炭鉱を描いた絵だけでなく、同時期に富山が東京に書き送った数多くの記事も付随している。

3. 複数の〈炭鉱〉、複数の〈越境〉

本研究では富山妙子が描いた二つの〈炭鉱〉のうち、①1950～60年代初めの三池・筑豊を軸とした「ルポルタージュとしての炭鉱」を金子毅が、②1980年代の「植民地主義表象としての炭鉱」を真鍋祐子が、それぞれ分担して扱った。そこには日本からド

イツへ、ブラジルへ、そして韓国からドイツへ、あるいは大日本帝国下の朝鮮から筑豊へと、さまざまな人びとの移動がその歴史的地層の中で複雑に錯綜している。

1) ドイツに渡った日本人炭鉱労働者たち

1945年5月8日、第二次世界大戦で無条件降伏したドイツは米ソ英仏の占領地域に分割された。東ドイツ地域はソ連に、西ドイツ地域は米英仏に占領された。連合国の初期占領政策はルール工業地域を国際管轄下におき、工業生産力を破壊し、ドイツを農業国に転換させるというものだったが、1947年のアメリカの占領政策の転換により経済復興援助政策が遂行された結果、西ドイツの工業生産は2年後には戦前(1936年当時)の水準を回復し、続く1950年代の「奇跡の経済復興」がもたらされた。戦争による人的損失は500万人以上だったが、敗戦で喪失したオーデル・ナイセ河以東の東部ドイツ領土からの引揚者、ソ連占領下の東ドイツ地域からの避難民は830万人にのぼり、労働力として「奇跡の経済復興」を根底から支えた。だが1961年8月13日に東ドイツが築いた「ベルリンの壁」が、東ドイツからの労働力供給を遮断することになった(森、2005: 19-23)。

人手不足は炭鉱でより深刻だった。ルール鉱山業においては、採炭など地下での重労働に適した26~45歳の年齢層の減少と、次代の炭鉱労働の担い手となる14~25歳の若年層の減少傾向に加え、身長、体重、視力など炭鉱労働者になるのに求められる健康状態のハードルが高く、年々炭鉱労働力の確保が難しくなっていた(森、2005: 25-26)。1951年に朝鮮戦争特需による石炭需要が増加すると、その後の経済発展とともに石炭需要はますます拡大した。こうして1950年代半ば頃には石炭鉱業の労働力不足問題が顕在化し、外国人労働者雇用への動きが出てくる(森、2005: 29)。

日本人炭鉱労働者のドイツ派遣は、労働力供給に関するドイツとイタリアとの政府間協定をドイツの官報を通じて知った労働省審議官(当時)・飼手真吾の発案による。1955年、政府間暫定協定により最初のイタリア人炭鉱労働者がドイツに到着したのを見た飼手は、早くも1956年1月に在独日本大使館を通じてドイツ政府の意向を打診するなど、実現に向けて動き出す。「ルール炭鉱企業連合」、および「日本石炭鉱業経営者協議会」「全国石炭鉱業労働組合」との折衝をへて、同年7月18日、ボンで日独両国労働省の間で合意文書「ルール石炭鉱業における日本人炭鉱労働者の期限付き就労に関する計画」の仮調印が行なわれた(森、2005: 33-35)。

1957年1月、ドイツ・ルールに派遣される炭鉱労働者の第1陣がデュッセルドルフ空港に降り立った。炭鉱労働者のドイツ派遣は1962年3月に渡独した第5陣が帰国した1965年3月をもって終了するが、森廣正によれば、第1陣から第4陣までの第1次計画が「技術を修得するため」の会社派遣だったのに対し、第5陣は炭鉱離職者対策としての派遣であった(森、2005: 53)。1962年7月12日付「Koelner Stadtanzeiger」には、「日本の炭坑産業が減少する一方なので、日本人炭坑夫はドイツに来る」という

見出しの記事が載っている。第5陣から始まる第2次計画で、日本側は総数1,500人の炭鉱離職者をドイツに送る計画だったが、わずか70名の一度限りの派遣で打ち切りとなる。森はその事情について、日本人炭鉱労働者のドイツ派遣計画に対する日独両国の思惑の違いが根底にあったとして、次のように述べている。

「炭鉱離職者対策と位置づけていた日本にとっての第2次派遣計画は、炭鉱離職者の再就職であり、既婚労働者が将来的には家族を呼び寄せてドイツに永住することが可能な「炭鉱移民」としての派遣であった。だが、ドイツ側は、若い独身の労働者で、期限付きの出稼ぎ外国人労働者を求め、既婚者（妻帯者）の受け入れは容認したものの、「3年間の期限付き就労と単身赴任の原則」を崩すことはなかった。」（森、2005：151）

ちょうど同じ頃、富山妙子は炭鉱離職者たちが向かったもうひとつの目的地、ブラジルにその足跡を追う旅に出ている。同じ炭鉱離職者の渡航先でも、ドイツとブラジルではどのような意味の違いがあるのだろうか。森は、「同じ敗戦国であったとはいえ、日本人炭鉱労働者の派遣は、後進国・日本から先進国・ドイツへの労働者の渡航という色彩が強い」と指摘し、以下のような労働省職業安定局の文書（1956年）のくぐりを引用している（森、2005：36）。

「わが国の移民問題は、従来は主として南米又はハワイに対する農業移民を中心として行われていたので、近代的労働者として然もヨーロッパのまん中へ進出することは今回がはじめてである。今後日本の労働者は国内のせまい労働市場にきょくせき（原文のママ）することなく、その勤勉、忍耐、努力と、培われた技能を生かし、大いに世界に雄飛しなければならないと思う。」

第2次計画における日本側の思惑は事実上の「棄民」ともいえるが、「近代労働者」として「ヨーロッパのまん中」の先進国・ドイツに派遣されるという筋立てによって、その事実は巧みに糊塗される。しかし実際、それは「主として南米又はハワイに対する農業移民」と表裏一体なのである。

次章で取り上げるように、富山はドイツ派遣から帰国した炭鉱労働者への聞き書きを行なっている。まもなく炭鉱離職者の過剰問題が生じると、彼女はドイツではなくブラジルをめざした。1964年刊行の『中南米ひとり旅』にはわずかだが炭鉱離職者たちに触れたくぐりがある。画家の直感がドイツではなくブラジルへ向かわせたことの意味と、彼女の目にブラジル日系人社会と、新参者の炭鉱離職者たちがどう映ったかについては、5章にて取り上げる。

高度経済成長を迎えた1960年代以降の日本では、炭鉱離職者たちにも再就職の可能性が開かれつつあったが、帰国者の圧倒的多数は所属会社の合理化と炭鉱閉山にともなう転職を余儀なくされた（森、2005：152）。他方では、第1陣から第5陣までのドイツ派遣日本人炭鉱労働者の総数436人中、34人が同国に残留した。またその中で、一度帰国した後、ドイツに再渡航した残留者が8人である（森、2005：53）。なお筆者（金子）の調査によれば、2018年8月現在、消息が判明した残留者は6名である。

2) ドイツに渡った韓国人労働者たちと富山妙子

日本人炭鉱労働者の派遣打ち切りと入れ替わるように、ドイツでは韓国人炭鉱労働者の受け入れが始まった。韓国との協定内容は全て日本との協定を参考にして作られ、1963年12月16日、韓独両国間で「西ドイツの石炭鉱業における韓国人炭鉱労働者の期限付き就労に関する計画」が発効される。同年12月末、最初の韓国人炭鉱労働者250人がドイツに到着し、その後1,000人単位で増加していった。1970年2月18日には新たな政府間協定が発効し、さらに1,000人の韓国人炭鉱労働者を受け入れる旨が記されている。結局、63年以来、「ドイツに派遣された韓国人炭鉱労働者総数は、約5,000人であった」とされる(森、2005: 221-224)。

一方、時期を同じくして、ドイツは韓国人女性を看護師として受け入れている。韓国政府による西ドイツへの労働者派遣の背景には、朝鮮戦争をへての分断後、韓国の戦後復興に対して無償援助してきたアメリカが、1960年代初め、国際収支の悪化を理由に有償に切り替えたことがある。韓国政府は経済開発政策の推進に必要な外貨を獲得するため、西側諸国を含めて多方面に援助先を求める必要に迫られた。

上述したように、森はドイツに派遣された韓国人炭鉱労働者総数を「約5,000人」と結論づけているが、在独韓国人たちの聞き書きを進めてきたテュービンゲン大学の歴史学教授イ・ユジェ(이유재)によれば、「1960年代と1970年代に韓国の海外開発公社と西ドイツの炭鉱協会および病院協会が結んだ協定、そしていくつかの私的媒介を通じ8,000人以上の坑夫たちと、11,000人を超える看護師たちが移住労働者として西ドイツに“派遣”された」という(イ、2014: 321)。ただし、看護師のドイツ移住が始まった正確な時期は明らかになっていない。すでに1950年代末にはドイツ赤十字病院、カトリック、プロテスタント教会・宣教団体などの機関や個人的な伝手を介し、看護修練生の資格で渡独した者が含まれるからである(イ、2014: 327)。韓国人炭鉱労働者・看護師も日本人炭鉱労働者と同じく、初めは3年間の期限付き労働契約で渡独したが、契約期間延長と長期滞留の権利を求める運動をへて、こんにちドイツに根を下ろしている。

1973年の石油ショックにより経済成長が失速し、失業者が増加する中で、西ドイツ政府は外国人労働者を強制帰国させることで失業問題を解決しようとした。1975年10月20日、カンプリントフォート鉱山の韓国人労働者23名に対する集団解雇が告げられると、ルール地域の韓国人労働者たちは自分たちの人権と生存をかけて、11月30日に「在独韓人労働者連盟」を結成した²⁾。

カン・ウォンヘ(강원희)によれば、1960年代初めに西ドイツはインド、フィリピン、タイ、韓国から看護師を受け入れたが、それは高度経済成長のおかげで、自国民が辛い長時間労働に引きかえ薄給の看護職にわざわざ就かなくとも、割の良い他の仕事を選べるようになったからだ。要するに、外国人看護師の受け入れは「長時間働かせることができ、安い給料を与えておけばよく、社会保障制度に関する法的保障も必要ない、つまり金を節約できるおとなしい働き手を得たことになる」という(강、2003: 135)。

1977年5月、韓国人看護師たちは、ミュンヘン市立病院から17人に集団解雇が告げられると、生存権を勝ち取るために「在独韓国女性の会」を結成する。6-7月には強制送還反対の署名活動を展開し、5カ月間で11,000筆を集めた。その結果、新しい連邦行政法として、1978年に外国人労働者に対する無期滞留許可と永住権が認められることとなる(苜、2003:136-137)。この運動には他の国々からの移民労働者たちだけでなく、旧世代の権威主義に抗議する1968年の大学闘争を経験し、フェミニズムやエコロジーの運動に参加してきたドイツ人たちも連帯し、そうしたつながりの中で彼女たちは社会問題に対する意識化を深め、自らの視点を切り替えて、ドイツ社会に根づきつつ積極的に生きる生き方へと転換を遂げていった。

そんな韓国の女性たちが富山妙子と出会うのは、1982年のことである。ベルリンで個展が開かれることになり、実行委員会に参加した日本人、韓国人、ドイツ人が交流を深めることになったという。1980年代初め、国際結婚をしている日本人の女性たちが当時ベルリンに滞在していた専門家を招き、国籍法の研究会を始めた。そこから生まれたのが「ベルリンの女の会」である。強制送還反対運動に参加した韓国人女性の多くは、軍事独裁政権による人権弾圧と朴正熙大統領暗殺、1980年5月18-27日の光州民主化抗争とその悲劇的な結末、全斗煥によるクーデターと執権など、祖国を覆う暗い政情に心を痛め、韓国民民主化運動に取り組むようになっていた。「ベルリンの女の会」会員たちは日本の戦争責任を内省しつつ、韓国民民主化運動にもコミットした。両者のつなぎ役となったのが1章で述べたIlse Lenzである。ベルリンで開催された富山の個展は、女性解放運動の拠点であるフェミニスト画廊と、ドイツ・プロテスタント教会の「ハウス・デル・キルヘ」を会場とし、1980年6月制作の「倒れた者への祈祷・1980年5月光州」版画シリーズが展示された。

2018年8月に面談したベルリン在住の元看護師・崔英淑氏は、1977年の強制送還反対運動の後、光州民主化抗争直後の5月30日、ベルリンで開かれた「軍部独裁打倒」「光州民主化闘争全副支持」の街頭行進にも加わった。彼女は「富山先生は光州の惨劇をいち早く世界に伝えたユルゲン・ヒンツペーター³⁾とともに、私たち韓国人にとっての恩人です」と述べた。

事実、富山が制作した光州の版画と、これをもとに構成されたスライド「倒れた者への祈祷—1980年5月、光州で倒れた者へ」(64スライド、12分)は、その複製可能性によってメディアとしての機能を十分にはたしたといえる。ヒンツペーターの映像は1985年、「ドイツ・ビデオ」と称して、留学生だった韓国人によって密かにドイツから韓国に持ち込まれ、民主化運動勢力の間に拡散し、地下で学習用に視聴された。同様に富山の版画も1980年代前半、複数の人物によって数度にわたり展覧会のチラシが密かに韓国に持ち込まれ、光州の人々や民主化運動従事者たち、民衆美術家たちを大いに励ましたという(図2)。

**PRAYER IN MEMORY
KWANGJU — MAY 1980
TOMIYAMA, TAEKO Part I**

倒れた者への祈禱 1980年5月光州 / 富山 妙子
쓰러진 이들에게 대한 기도 1980년 5월 광주 / 도미야마 다에코



Prayer in Kwangju / 光州のピエタ / 광주의 어머니

1980. Lithograph

(图2) 光州의 피에타

これについては富山自身、雑誌の座談会で次のように証言している。

「80年当時に私が送った絵が「光州のピエタ」というカレンダーになって、それがドイツから光州の教会に送られてきたという。まだ声もあげられない弾圧の厳しい軍事政権の頃、姜信石牧師が、教会の奥に「隠れキリシタン」の絵のように、信徒たちに「外ではこうやって我々を見守ってくれているのだ」と言って、密かに皆に見せていたという。」(針生ほか、2000:257)

1980年代半ば以降、富山の創作活動は日本の戦争責任に踏み込む内容となっていく。なぜなら1970年代の金芝河、1980年の光州を描きながら、そうした過程が植民者の子としての自身の歴史を位置づけ直すことになったからだ。1984年に始まった筑豊炭鉱の朝鮮人強制連行をテーマとする巡回展「はじけ鳳仙花—わが筑豊・わが朝鮮」はパリとベルリンでも開催され、1985年にはベルリンのキネマテークで映画「はじけ鳳仙花」が上映された。続く1988年には「女の目からみた戦争」というサブタイトルのついた個展で、スライド「海の記憶—朝鮮人従軍慰安婦に捧げる」(80スライド、25分)が上映された。

「はじけ鳳仙花」の主題となる〈炭鉱〉は「植民地主義表象としての炭鉱」であり、「海の記憶」を貫くフェミニズムはかつて富山が「ヨーロッパ的フェミニズム」と驚嘆した(次章参照)、レディ・ファーストという男性の女性に対する形式的な行為とは、次元の異なる思想である。

1991年、富山はある会合で次のように発言している。

「アジアにおける日本の植民地支配に関する言説はしばしばフェミニストのパースペクティヴを欠落させており、一方、日本におけるフェミニズムは十分に民族的、植民地的抑圧を考慮に入れてこなかった。」(Jennison、1996:86)

つまり富山の思想では、ポストコロニアリズム批判はフェミニズムと分かちがたく結びつき、さらにフェミニズムには、支配される側の語られない「言葉」への洞察が不可欠というのである。それは被抑圧者の歴史的文化的コンテクストに立ちながら、植民地支配が支配される他者にとって、なぜ、どのように心痛む出来事なのかを想像し、共感すべきものでもある。

3) 炭鉱・シュルレアリスム・対蹠地点

1939年、富山は女子美術学校(現・女子美術大学)に入学するが、プロレタリア美術運動に共鳴し、退学処分となる。美術評論家の外山卯三郎(1903~80年)を院長とする画塾に入り、昭和初期に初めてシュルレアリスム絵画を紹介した福沢一郎(1898~1992年)に学ぶ。

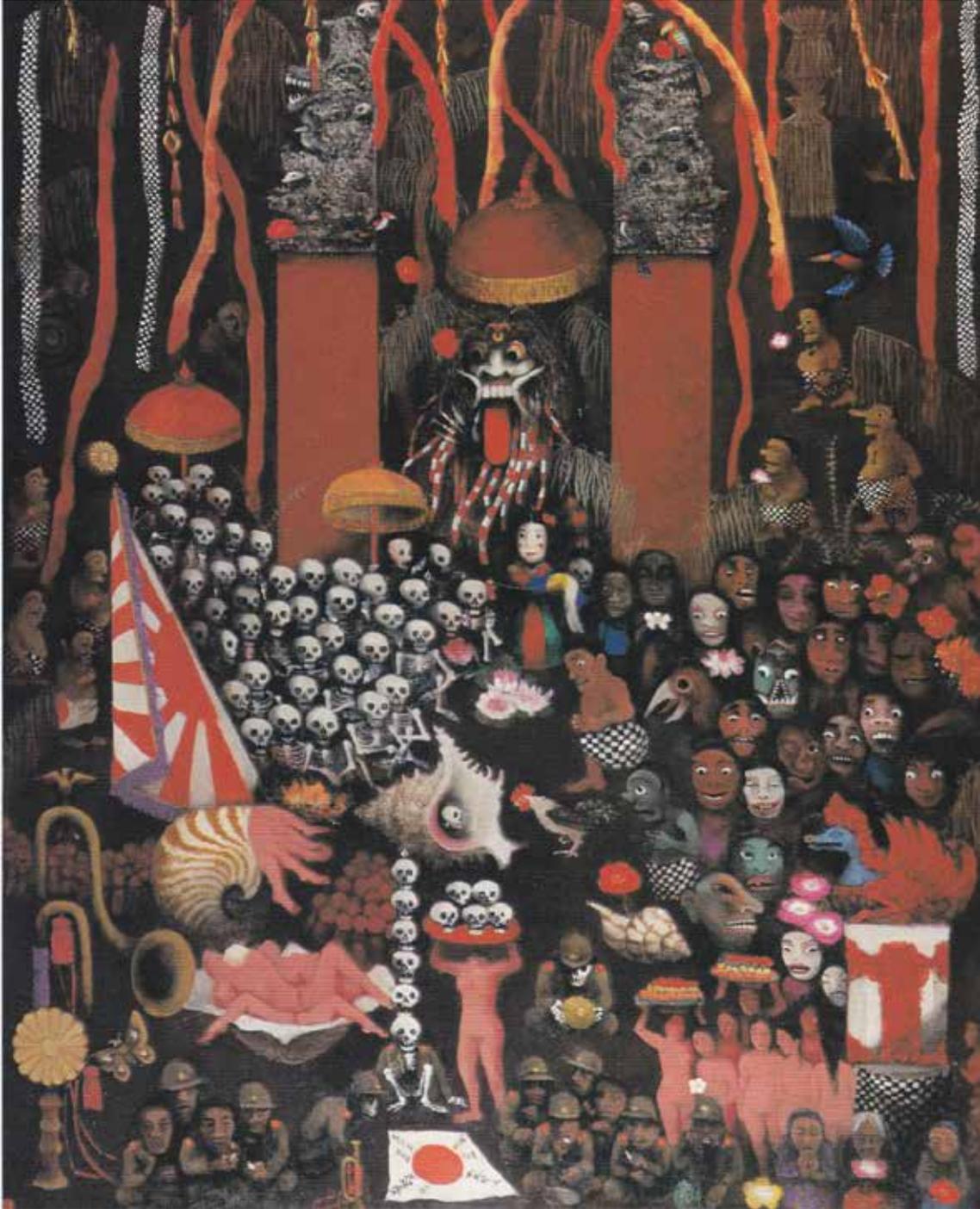


(図3)「捕われて死んだ子に」

後年、富山の作品におけるコラージュの手法には、鶴見俊輔が論じた「対蹠地点」の視座を取り入れた独自の表現形式が見出される。鶴見は日本の戦争責任について地理学概念の「対蹠地点」を援用し、強制連行された朝鮮人の存在に着目して、「自分が足をつけている場所と逆のところに足の裏をつけて立っている人がいるはずで、その人の体験とともに自分の、いまの体験を見る力」が必要だと説いた(竹内・鶴見、1971:92)。

たとえば、それは「はじけ鳳仙花」を構成する一枚に見てとれる(図3)。筑豊のボタ山はただのボタ山でしかないが、画家の目にはそこに強制連行された夫や息子を想って嘆き悲しむ故郷の妻や母、また炭鉱労働で犠牲となった夫や息子の死を悲しむ妻や母の姿が投影され、そうした心象がシュルレアリスムの手法で表現されている。これは同時に、ボタ山という場をめぐる「対蹠地点」の表現形式にもなっている。

「海の記憶」を構成する一枚、ジャワの海底に眠る朝鮮人慰安婦を描いた1984年の作品「ガランガンの祭りの夜」(図4)では、画家の心象として描かれる「他者」のイメージが、ジャワのガムラン、仮面劇やムダンなどの朝鮮の土俗的な事物を用いて造形されているのが見て取れる。なぜなら、それらの伝統的事物は「他者」にとって歴史の地層に蓄積された記憶そのものだが、大日本帝国から見ればあくまで「対蹠地点」の存在だからだ。「帝国の慰安婦」は皇軍兵士と同じ帝国臣民として同志的な関係にあったとする議論があるが、この作品はそういう見方に真っ向から対峙する。慰安婦の心象を朝鮮古来の仮面劇のモチーフで描くことは、同じ時代を同じ帝国臣民として戦場をともにしながらも、両者が互いに「対蹠地点」の関係にあることを暗示している。



(図4)「ガルンガンの祭りの夜」

次章で取り上げるルール地方に派遣された日本人炭鉱労働者たちのエピソードは、「ジェンダー差別と植民地差別」が同じ構造の上にある(坂元、2018)日本の植民地主義において、つねに被抑圧者の側に立ってきた富山からすれば、自分が足をつけている場所の真裏にある対蹠地点の出来事にほかならない。朝鮮特需のおかげで隆盛をきわ

めたドイツの石炭鉱業は、同時期の三池や筑豊のそれであり、遡っては総力戦を前に「全炭鉱総突撃」のスローガンに湧いた 1930 年代の同じ場所のそれでもある。富山が筑豊のボタ山に透視したのと同じように、ルール炭鉱にも物言えぬ戦火の人々の呻きと悲しみが絡みついているのではないか。なべて豊かな生活をドイツで送れた炭鉱労働者たちがいた一方で、ブラジルに向かった彼らの元同僚たちは塗炭の苦勞を味わった。他方、外貨獲得のためにドイツに移民労働者を送った韓国政府は、これと同じ理由で中東に出稼ぎ労働者を送り、またベトナム戦争に韓国軍を派兵し、泥沼化する戦闘の中でベトナム民間人の大量虐殺を引き起こさせた。

次章では、あえて富山が会うことのなかったドイツの日本人炭鉱労働者の生活をたどることとする。それにより、これとは対蹠地点にある富山の画家人生と作品世界の意味を裏側から照射したいと思う。

4. 国境を超えた坑夫たち—ドイツ・ルール地方派遣坑夫たちの労働と生活

1) 「ルール帰りの男」との邂逅

富山妙子の初期作品『炭坑夫と私』には西ドイツのフリードリッヒ・ティッセン炭鉱帰りの 25 歳の日本人坑夫 H とのインタビューが掲載されている（富山、1960：201—204）。粋な背広を着こなした「ルール帰りの男」は、身のこなしといい、その物言いといい、これまで取材を重ねてきた日本人坑夫たちとは明らかに隔絶したものがあつた。またタバコを吸う際には女性である自分に先に勧めてから吸うという仕草が自然に出てくるところにも「ヨーロッパ的フェミニズム」を感じ取り、驚きの余り、富山は「わずか三年間でそこに西欧があつた」と書き留めている。

H が語ったところによると、一か月当たりの給料が日本円で 7 万円と自動車を購入できるほど破格であつたこと、週末になるとマイカーで「モーゼルやラインのワイン祭りに出かけ」たり、バスを貸し切ってオランダまで出かけたことや、炭鉱の近くに巡回してきたオペラを見に行くなど、優雅な生活ぶりが窺える。これはハモニカ長屋でタクアンをかじりながら暮らしている日本の坑夫からは、およそ想像の及ばない「大会社の部課長級」の待遇である。

彼らは職業意識という点でも日本とは異なるものを身に付けていた。そのため彼ら帰国者が労組に意見を述べると「ドイツかぶれ」と一方的な批判を受けたようだが、ドイツの職制は日本のそれよりはるかに厳格で、「働かないとびしびしやられる」だけでなく、同じ炭坑夫といってもドイツでは「むずかしい国家試験を受けてパスして」初めてなれるものだから、「ただ大学を出ていれば職員になり出世ができる日本」とは全く異なる。社会保障制度も充実しており、労働者たちはもとより職業人としての誇りを抱いているし、社会の側も彼らに対して尊敬の念を抱いているという。

また、彼が下宿していたハンボルンには女性がサービスをする飲食店はわずか一軒だけだった。ある時、ルール炭田側の監督が来日した際、接待で「百人近い半裸体のサー

ビス嬢に囲まれた東洋的ハレム」を呈する銀座のキャバレーに連れて行かれて、少なからず仰天したというエピソードがある。これは日独間における性意識の違いを物語る事例として興味深い。

次節以下では、「国境を越えるという労働移動を通じた体験が当人にどのような生活とこれによる職業認識の変化をもたらすか」という観点から実施した2017・2018年度のルール地方でのインタビュー調査で得られた証言をもとに、坑夫 H が語った上記の内容について裏付けていくことにしたい。

2) ドイツ派遣坑夫の状況

日本人坑夫の派遣は1957年の第1陣に始まり、1962年の第5陣まで、それぞれ任期3年で7回に分かれて実施された。派遣された人数は436名で、第1陣(59名)第2陣(180名、60名ずつ3班に分かれて派遣)、第3陣(60名)、第4陣(67名)、第5陣(70名)という状況であった。この坑夫派遣は西ドイツ政府との間での契約を結んだ上での国家事業であったが、第1陣から第4陣までは第一次計画とされ、「技術を修得するための会社派遣」であったのに対して、第5陣は三池闘争以後、炭坑事業が斜陽に差し掛かったことから、「炭鉱離職者対策」としての派遣と性格を異にしたものであった(森、2005: 52-53)。前述した H の強固な職業意識の背景は、この技術習得に向けて選出された「日の丸を背負った会社派遣」という第1次派遣の性格を色濃く物語っているものと考えられる。

調査では第1次派遣坑夫に直接話を聞くことはできなかったが、ドイツ人と結婚し、残留している第3陣・第5陣の元坑夫(いずれも派遣先はフリードリヒ・ティッセン炭鉱)に話を聞くことができた。次節では、第3陣の A 氏に対する聞き取りをもとに、ルール帰りの H がたどった道のりを跡付けてみたい。

3) 第3陣派遣坑夫 A 氏(80): モンターバウアー近郊在住

ドイツ派遣の前は住友赤平炭坑で3年間、レールの敷設などの坑内鉄道の整備作業に従事していた。第3陣(1960年)のことを知ったのは22歳の時、第1陣で渡独した隣人より話を聞き、応募して派遣が許可された。決定後、直ちに体格検査を受けた。この時、ことにドイツは落盤などの事故が多いからと、親兄弟が宿舎まで来て本人を連れ帰るケースも見られたという。深田祐介の『われら海を渡る』には、第1陣の宇部興産出身の本覚芳郎氏が坑内事故で死亡したことが記されている(深田、1984: 196-198)。その後、東京、横浜に集められ、二週間ドイツ語を勉強した。鉄柱を刺して持ち上げる際に使用するものなど、道具の名称を覚えさせられた。

ボーイング 707 で羽田を出発し、アンカレッジ経由でデュッセルドルフに到着後、バスを乗り継いでフリードリヒ・ティッセンへ。宿舎である「カスパースホーフ」に集まり、会社の係長クラスの人々や労働組合関係の人とともにドイツビールでの歓迎会が

催された。その後、60名を二つのグループに分け、会社から個人名付きの真鍮製の名札と労働関係の書類を手渡されたという。

会社では、入社時に入り口で箱の中からNo.付きの札をもらい、退社時には箱にそれを投げ入れるというシステムだった。札は落とさないように服の中に入れておいた。坑内作業に先立ち、着替えの際は、U字状の籠に衣服、靴、手袋などを入れ、盗難防止用に鍵をかけて7メートル位の高さに吊るす。その後、15人ほどが並べるスペースのお茶の配給コーナー（黒や黄色など5種類のもが用意されている）に行き、好みの甘さ、味のものを選び取り、それからヘッドランプを取り、腰に酸素マスクを下げ、坑内に入る。坑内は火気厳禁となっているため、入り口で保安係より点検を受ける。坑内作業は6:00、14:00、22:00の三交代制となっていた。坑内には4段ケージに乗り、1分もかからずに坑口に到着。この時、扉を開ける人と出会い頭に「グリュックアウフ（「ご安全に」の意）」と挨拶を交わす。作業場所に向かう途中でも、親しい人に会うと同様の挨拶を交わす。

仕事内容という点では日本とはあまり違いを感じることはなかったが、掘削作業は日本のように斜めに掘り抜く狸掘りの形式とは異なり、ホーベルという大型のカッターを取りつけた機械で大きく平らに掘り抜く形を取っていたので最初は戸惑った。坑内は暑いために真っ裸で作業をしている人もいたが、時々、視察の人が来ることからシュタイガー（係職員）に注意されたという。万一、坑内で事故が発生しても会社の附属病院はないため、怪我人や病人はハンボルンの町の病院に運ばれるしかない。

作業後は再びケージで上に上がり、50基ほどが並ぶシャワーで互いに隣り合った者同士で身体を洗い合う。その後、ランプの充電をしてから衣服の入った籠を下ろし、タバコを吸って休憩。札を箱の中に投げ入れ、退社となる。

富山にHが語っていたように、収入は日本の2倍近くとなった。ホーベルが自動的に石炭を掘り、落ちた石炭をベルトコンベアにのせて自動的に下の箱に落とすが、そのベルトコンベアのポジションを変更するごとにスタンプを押すシステムで成績が図られるようになっていた。この「スタンプ制度」は勤勉さを表す目安となっていたようで、日本人はともに働くドイツ人よりもスタンプが多かったため、とても評判が良かったという。

1960年の入社当初、A氏は、掘る資格がないため坑外作業しか行なえない「プラッツアール（一般坑夫）」だったが、1963年1月1日には口頭試験に受からないと取得できない掘削に従事するための「ハウアーブリーフ（先山資格）」を取得した。さらに高位の炭坑夫の証である「シュタイガーブリーフ」は、他の日本人3人が取得している。これらの資格があればドイツ国内での就労も可能になる。

ちなみに、前出の森（森、2005）によると第1陣の資格試験合格者は40名で、派遣坑夫の大半を占めていたという。もしHがこのような有資格者であったとすれば、前述した職業意識の高さという点も頷けよう。1962年7月21日付「Oberfrankische

Volkszeitung」の掲載記事「ルール地方外国人労働者のメルティングポット：日本は人気、トルコは違和」には「ルール地方の人は外国人労働者の中では日本人が一番人気。優秀な人というイメージ、教育レベルが高い、アクティブな民主主義者として帰国する、ルール地方日本人 250 人」という記載があり、また 1961 年 4 月 8 日付「Braunschweiger Zeitung」にも「若い日本人炭坑夫はプライドに充ちたままに帰国」という見出しで、それは日本人炭鉱労働者たちがドイツでマイスター資格を取ったからだと記されている。これらの記事では日本人坑夫たちの勤勉な働きぶりが報じられている。

では、日常生活はどうであったか。6：00 始業の場合、「カスパースホーフ」に戻ってから昼食となる。メニューは日によって決まっており、金曜日は魚の煮付け、土曜日は白豆の入ったスープであり、スープは美味しかったが、ジャガイモとパンはそうでもなかったという。食事については 1961 年 10 月 24 日付「Bremer Nachrichten」に掲載された「日本人にとってドイツのスープが一番重要」で、日本人が行先を選ぶ際の決め手は、ドイツはスープがおいしいからドイツにした、と記されている。

交代時間の変更により坑内にサンドイッチの弁当を持参して入ることもあったが、パンが不味いので、腐りにくい中身のサラミだけを食べて、パンは捨ててしまっていた。また日本食に飢えると、合間をみて毎日 1 人が料理することもあった。ただし A 氏自身、料理はしなかったという。ある時は野草を取りに森に行き、管理人に怒られるなど、ちょっとした事件を起こしたこともあるという。

ドイツ人との結婚については、1962 年 7 月 17 日付の「Augsburger Allgemeine」に「ドイツのマルクと娘が日本人炭坑夫をドイツにいざなう：初めての日本人労働者は満足してルール地方から日本に帰る」という見出しの記事が掲載されている。そのことを裏付けるように、A 氏は山田という通訳からドイツ人と結婚して帰国するよう推奨されていたという。だが実際にドイツ人女性と結婚して帰国したのは、第 3 陣では A 氏のみだった（その後、再渡独）。また、逆のケースもあった。1961 年 1 月 21 日付「Westdeutsche Allgemeine」には「北村さんは花嫁をドイツに呼び寄せる」という記事が出ている。

以上、A 氏の語りと新聞記事の見出しから、派遣坑夫たちの生活の様相を垣間見てきた。次に、彼らの「遊び」という側面を取り上げてみたい。だが残念ながら A 氏の語りには遊びの場面が出てこなかったもので、補完的に第 5 陣の B 氏の語りに耳を傾けることにしたい。

4) 第 5 陣派遣坑夫 B 氏 (80 歳) : ハンボルン在住

三井田川鉱業所に勤務時代、第 2 陣から志望したが、経験が浅いと理由で断念、第 3 陣も係長から断られた。第 4 陣はあえて志望しなかった。退職後、鉱業所が閉山となり、しばらくは親戚が経営する大阪の建築会社の手伝いをしてしたが、「鉱業促進事業団」が第 5 陣を募集していることを知り、早速応募したという。

第5陣に当てがわれたドイツでの宿舎は、カスパーホーフより 300 メートル離れたクライエンホーフであり、一部屋3名の部屋割りとなっていた。

B氏も1964年に先山資格を取得している。8時間は休む時間が与えられており、そのため残業に対してはやかましく注意されていたが、出炭量によっては2-3時間程度の残業をしないといけないこともあり、機械の故障でもあると土曜出勤となる場合もたまにあった。基本的に土・日は休日で、休暇ともなると、ハンボルン市内に7軒あった映画館に出かけたり（日本映画の上映はなかったという）、また給料から3万円程度を前借して新車を持っていたマルオ氏（第2陣）とともに国外に出かけた。ことに記憶しているエピソードは、第3陣の三井の通訳・アカオ氏とともに出かけたベニスへオペラを聞きに行く5日間の旅行だったという。スイスではマッターホルンの見える場所でテントを張り、トリノを経由してベニスに到着した。しかし、暑さにまいってしまい、肝心のオペラは取り止めとなってしまふ。それで、せっかく持って行った背広も着用できなかつたという。

また単身の青年労働者たちにとって、性の処理はどのようになされたのか。Hが言うように、ハンボルン市内には女性がサービスする店がなかつた。そうした環境は彼らに、Hが富山に示したような「ヨーロッパ的フェミニズム」を身に付けさせた一方で、若い性欲を満たすための対象を外に求めさせることになった。B氏たちは飾り窓で有名なオランダのアムステルダムまで出向いて満たしていたと語る。価格は大体5,000~6,000円ほどで、一か月の給料で十分賄えるほどの額だったという。

5) 小括—去るも地獄、残るも地獄

このように派遣坑夫たちを取り巻く環境においては国境を越えるという行為が日常化していた。栄養に富んだ食物をきちんと摂り、社会保障制度が完備され休暇もきちんと消化することが保障された勤労状況、それに加えて、広大なヨーロッパの国々を自家用車で縦横無尽にかけめぐり、そんな日常が彼ら派遣坑夫たちに存在していた。それならば帰国後に目にした、狭い島国で休暇もろくに取れず、社会保障制度もあいまいで、いつ果てるともしれない長時間労働にあえぐ同胞の坑夫たちの現状に、Hたちが出来たことは何だろうか。それは周囲の批判を恐れず、一言具申することであつただろう。しかし、それは「ドイツかぶれ」の一言で封じられてしまうのだ。

そんな現状の日本の石炭産業だが、そこに留まろうとしたドイツ帰りも当然いた。だが石炭不況に喘ぐ中で、最後まで炭坑に居座った者がいた一方で、大半の者たちは転職を余儀なくされ、これまで身に付けたドイツでの資格を破棄せざるを得なかつたという。

A氏もB氏も、そのような現状に嫌気がさして再渡独した有資格者である。だが彼らもまた安泰というわけではなかつた。ドイツでも脱炭鉱の機運が高まっていたからである。A氏は1967年に再渡独したが、フリードリヒ・ティッセンはすでに廃業しており、近郊のティッセン製鉄会社（現、ティッセン・クルップ製鉄会社）に勤務せざるを

えなかった。そこで炭坑の技術に不可欠な坑内採掘マイスターの資格を取りたかったが、事務の担当者から「製鉄所には坑道がないから、炭坑の技術はいらない。製鉄労働者が必要なのだ」と一蹴されてしまったのである。せっかく苦勞して取った資格を生かせず、製鉄労働者として技能の学び直しを求められることになった。

つまり派遣坑夫たちにとって、「去るも地獄、残るも地獄」という意味ではドイツも日本も似たような状況であったのだ。

6) 補足—韓国人坑夫との接点

最後に、ドイツに残留した A 氏や B 氏が語る韓国人坑夫像についても触れておきたい。

森によれば、1963年の条約発効以降、約15年にわたり渡独した韓国人坑夫の数は日本人坑夫の総数を遥かに上回る約5,000人に上るとされ、ルールやアーヘンにある炭鉱で働いていたという（森、2005：224）。要するに、彼らは日本人坑夫の数が減少し始めた時期に就労したのであるが、A 氏や B 氏の述懐によれば、その大半は本国での就労経験を持たぬ農民たちであり、勤務状態という点では「怠け者（不適切な労働者）」と見なされていたという。

B 氏がアウグス・ティッセン石炭会社で働いていた時のエピソードがある。

各班2名ずつに分かれて鉄柱を回収する最中に、作業の仕方が悪くて天盤が崩れ、鉄柱がズレて落盤した。その後始末として日本人が割り当ての鉄柱を全て回収したのに対し、韓国人は8割くらいしか回収しなかった。そのため、給料日に手渡された額が少なくなってしまう、係員から「あいつらを殴れ」と命令されたという。

ドイツ人は日本人と韓国人の炭鉱労働者に対して、勤勉な日本人と「怠け者」の「ガストアルバイター」止まりの韓国人、という対照的な価値判断をしたというが、B 氏の経験はそれを象徴するエピソードであろう。

結局、韓国人坑夫のうち約3分の1はドイツに残留し、約3分の1はカナダの炭鉱へ移動し、残りの3分の1が帰国の途についたという（森、2005：224）。

ドイツ残留者の中にはドイツ人女性と結婚した者もいると推定されるが、韓国人の場合、「ちょうど時期を同じくして、韓国から大勢の看護婦（当時の名称）が出稼ぎ労働者としてドイツで就労していた」（森、2005：225）事情により、韓国人同士で結婚し、定住が認められていたと考えられる。しかし残留者の中には就労年数が短いまま鉱山が閉山となった者もあり、B 氏によれば、年金も少ない彼らは豆腐屋など小規模の店を営む者がいる一方で、家もなく道端で寝ている元同僚もいたという。

5. 富山妙子における「越境」の意味—鉱山画家から「画家」へ

画家・富山妙子の最初期の画題は〈炭鉱〉だった。斜陽を迎えたヤマから押し出された離職者＝「棄民」たちを追ってブラジルに渡ったのが、彼女がその後繰り返すことに

なる「越境」する画家人生の始まりだった。

同じ炭鉱離職者でも、富山が選んだのはドイツへ向かう人たちではなかった。坑夫 H への聞き書き（前章参照）から受ける印象では、富山の中に、「ルール帰り」は物心ともに豊かな現地生活を享受し、「ヨーロッパ的フェミニズム」を身に付けたエリートという認識があったように思う。当時、中国革命に関心を寄せ、魯迅やスメドレーを読んで感動していた富山にとり、彼らは画題に適さなかったと考えられる。

ブラジル、チリ、メキシコ、キューバへの旅を終えて、富山は 1964 年に『中南米ひとり旅』を刊行するが、文化人類学者・泉靖一が寄せた「まえがき」に次のようなくだりがある。

「この旅行をとおして、富山さんは、鉱山画家から、画家になるのではないかと考えている。チャールス・ダーウィンが、ヴィーグル号の航海によって、平凡な一学徒から、大博物学者に変わったように、旅は若い人々の人生を、しばしば急激にかえる。よし急激にかえなくとも、忘れたものを思いださせたり、停滞しているものを促進させるのに役だつ。」（傍点は泉による）

鉱山画家から画家へ。泉の言葉は、その後の富山の画家人生を鮮やかに言い当てている。ラテンアメリカで出会った第三世界のナラティブ・アート、文化抵抗運動としてのメキシコやキューバの芸術運動は、1970 年代、富山に対し、確かに「忘れたものを思いださせた」。アメリカ覇権主義に抑圧されたラテンアメリカの国々に見出されるポストコロニアル状況は、そのまま大日本帝国とアジアの人々、そして戦後の日米韓同盟と分断された韓国との関係性にも投影されていた。この時、富山が思い出したのは、植民者の子として過ごした満洲での少女時代だ。

1950～60 年代、彼女は「ある種の使命感」をもって炭鉱を描いていたが、どこかに「違うな」という気持ちを抱えていたという。だがラテンアメリカの旅をへてアジアと出合い直し、そこに自分の来し方を重ね合わせた時、初めて炭鉱が「自分の存在をこめて語れるもの」となった（富山・真鍋、2010：5）。まさに泉が言うように、旅が「停滞しているものを促進させ」たのである。

炭鉱離職者を追ってブラジルまで渡った富山だが、結局、炭鉱離職者の絵は描かなかった。サントス港に上陸して早々、こんな光景を目にする。その日、日本船とオランダ船、イタリア船が入港していた。

「ヨーロッパの貧しい国々——バルカンやイベリア半島からきた移民たちは、粉袋に世帯道具をつめ、ほんとうの裸一貫で海を越えてきたのだという。だから、トランジスタラジオに電気ガマ、ミシンまで持ってくる日本の移民をみて、あんな金持ちがなぜ移民になるのかとふしぎがるそうだ。」（富山、1964：48－49）

日本の移民は電化製品だけでなく、天皇崇拜や日本社会のさまざまなしがらみまで引

きずって来ていた。ブラジル議会に立候補したある政治家は「日系のみなさん。私の右手はおそれ多くも天皇陛下と握手した手であります。それいらい私はこの右手を洗ってはおりません」と演説して、当選した。日本人町では“何県人か”という点がまず重要な問いだった。神戸、大連、ハルピン、東京、九州と各地を転々とし、故郷をもたない富山は、“東京都民会がありますよ”と言われるが、「地球の裏にまできてつきまとう「息のつまる世界」に属する気にはなれなかった」と吐露し、「自由の区と名づけた地域にある日本人町は、その名とはほど遠いところに思われた」と記している（富山、1964：58-62）。

数名の炭鉱離職者たちにも会っている。大手の炭鉱（軍艦島）で働いて 28,000 円の月給を得ていたある離職者は、30 万円を懐にやって来たが、入植生活に耐えきれず、ブラジルを「緑の地獄」と呼んで、日本へ帰ろうとしていた。一方、九州の中小炭鉱から来た者たちは「生きてゆくにはブラジルよりほかにはない、帰るに帰れぬ背水の陣の出発であると語った」という（富山、1964：67-68）。

富山は「すべての苦しみに耐える心の底には、自作農になり大農園主にまでなれるその夢があるからという」と記しているが（富山、1964：69）、後年、これについて面白い証言をしている。2013 年、ブラジル在住の映像記録作家・岡村淳監督のインタビュー⁴⁾に応じて、こう述べている。軍艦島から来ていた人（上述）が「こんな野蛮人のところに来るんじゃなかった、と言ってましたよ」。一方、佐賀の小ヤマから来た「ここに定着しようという人が、こんな良いところはない。早く土人を使う身になって」と語っていたという。これを聞いた富山は、「もうガクンとくるんですね。日本人のあの頃の意識ってのは」と嘆息した。

「野蛮人」や「土人」といった炭鉱離職者たちの発言は、おそらく著書から意図的に省かれたのだろう。これらの言葉が示すように、日本人移民には、「棄民」として国から追われるように遠く地球の裏側までやって来ようとも、骨の髄まで植民地差別の意識がしみついている。これと対照的な存在が、粉袋一つ担いで裸一貫やって来るバルカン移民たちの姿であった。富山は続けて言う。

「日本は帝国主義国家でね。あるところまで世界でアメリカに次ぐ（略）生産力では大国ですよ。そこの難民ですからね。バルカンからズダ袋で来るのと……。サンパウロに行ったらね、ブルジョアジーの方ですよ、日本人なんて。なんだかんだ言たって、ちゃんと日本政府がついてますからね。なんかねえ、だからそういう意味で、炭鉱離職者訪ねてるうちに、描く気しないんですよ。」

炭鉱離職者を追ってきた富山がブラジルで目にしたのは、地球の裏側まで帝国主義と植民地差別を引きずってくる日本人と、これと対照的な存在として、スペイン戦争からの亡命者や、世界中から吸い寄せられて来た極貧の移民たち、また厳しい亜熱帯の気候・風土の中で貧困にあえぐ北部のノルデステの流民たちの、悲惨でありながらも逞しい姿と、その裏返しである反権力の気骨であった。こうして富山の画家としての関心は

炭鉱離職者から、移民・難民・流民という普遍的な問題へと昇華された。

鉱山画家から「画家」になった富山が、再び（炭鉱）を描くようになった時、それは強制連行された朝鮮人坑夫に表象される「植民地主義表象としての炭鉱」だった。もはや日本の炭鉱や坑夫たちは画題ですらなかった。大日本帝国の治下で難民や流民となるのを余儀なくされたアジアの人々、ことに1970年代の韓国での体験を通じて「韓国にアイデンティティを移した」と述べる富山が、最も共苦共感を寄せたのが、家族と故郷から引き剥がされて連行され、そして帰って来なかった朝鮮人坑夫や慰安婦という存在である。

次に、富山が最初の岐路で選ばなかったドイツへ渡った炭鉱離職者たちに目を転じてみよう。前章で記したように、A氏やB氏は在独韓国人坑夫の大半が「本国での就労経験を持たぬ農民たち」と述べているが、この証言の信憑性については留保が必要であろう。自身も両親に連れられて渡独した移民である在独韓国人の歴史学者イ・ユジエは、論文で「残留した韓国人炭鉱労働者の多くは都市中産層出身、大卒者もいた」と述べており（イ、2014：327）、筆者（真鍋）がベルリンで在独韓国人数名に面談をした際にも同様の話を聞いている。加えて、勤労態度が「怠け者（不適切な労働者）」と見られていた点についても検討を要するだろう。朝鮮には肉体労働を卑下する儒教倫理的な職業観があり、大学教育が大衆化される以前の、1960～70年代における「都市中間層出身、大卒者」ならば、慣れない炭鉱での肉体労働に抵抗感を覚えたとしても不思議はないからだ。

つまり韓国人と日本人の炭鉱労働者たちは、その文化的な出自も違えば、経験してきた歴史も、ドイツに来ることになった経緯も全く異なった「対蹠地点」にいたのである。特に大きな懸たりはドイツに派遣された経緯である。日本人坑夫たちも「去るも地獄、残るも地獄」という状況の中、帰国を諦めざるをえなかった炭鉱離職者たちだった。一方、韓国人坑夫たちは、当時まだ最貧国だった分断祖国の軍事独裁政権によって、経済開発政策に必要な外貨と引きかえに、あからさまに売られてきた人たちだった。その淵源には日本の植民地責任に起因する分断、および朝鮮戦争による国土の荒廃、そして先進国の中で戦後も形を変えた植民地主義として引き継がれた「特需の思想」（本橋、2005：217－218）が見出される。

だが、富山はこれら韓国人坑夫たちとも出会っていない。1982年に富山がベルリンで初めて出会い、その後も交わりを続けてきたのは、看護師として派遣された韓国人女性たちだった。1970年代にフェミニズム思想に触れ、植民地主義をフェミニストの視点からとらえるようになっていた彼女にとって、それは自然な流れである。そして個展会場のひとつは、女性解放運動の拠点であり、女性だけが入場を許されるフェミニスト画廊であった。

富山が依拠するフェミニズムは家父長制批判を超えたところにある。それは植民地的抑圧の痛点となる部分を凝視し、そこに埋もれた声なき声に傾聴することである。富山

の作品群が示すように、画題は必ずしも女性に限定されるのではなく、男性たち一獄中詩人（金芝河、パブロ・ネルーダ）、光州抗争の犠牲者や、強制連行された筑豊の朝鮮人坑夫たちも対象となる。それでも、植民地的抑圧の痛みを集中的に受ける被抑圧者の中で最も普遍的な存在は「女性」であり、日本や朝鮮のような家父長制の社会ではなおのことそうである。だからこそ、ベルリンにおいて日本と韓国、ドイツの女性たちは、富山妙子の個展の実現を共通の目標として、互いに手を携えることができたのだろう。

次に、富山自身の「越境」と作品の「越境」とは別に、もうひとつの「越境」についても触れておきたい。2017年、ソウル歴史博物館で「国境を越えて、境界を越えて—ドイツに渡った韓国看護女性たちの話（국경을 넘어 경계를 넘어—독일로 간 한국 간호 여성들의 이야기）」（6月27日～10日9日）と題する特別展が催された。展示の中で印象に残ったのは、看護師で稼いだ給料で自家用車を購入し、ヨーロッパを旅する女性たちの澁刺としたポートレートだった。韓国を離れたドイツでの暮らしは、それまで女性たちを呪縛していた家父長制からの解放でもあり⁵⁾、そのひとつの象徴が自家用車だったという。

自家用車で国境をいくつも越えながらヨーロッパ大陸を旅する経験は、日本人坑夫たちにも共有されたことである。前章で紹介したHやB氏は、オペラ見物やその他の用事で、まるで隣町にでも出かけるように、自家用車で国境を越えた。B氏は帰国した元同僚から「あんた、残ってよかったばい」と言われたことがある。マイスターの有資格者として帰国した同僚たちを待ち受けていたのは日本の石炭鉱業の衰退であり、彼らはせっかく磨いた技術を生かせないまま転職を余儀なくされた。ドイツでも同様の状況は少し遅れて生じており、結局、残留者たちも炭鉱を去ることになるのだが、わずかでも長く坑夫として働いたことが羨まれたのである。だがA氏やB氏と間近に接しながら、筆者（金子）には、「残ってよかった」ことのもう一点が「国境」を縦横に越える自由の体験、ひいては国籍や民族、さまざまな社会通念といった「境界」をも越え、世界を見る目が開かれていく体験ではなかったか、とも見受けられた。

韓国人看護師たちは「自家用車」に象徴される「越境」体験を通し、「ベルリンの女の会」に集う日本人女性たち、1968年の学園闘争の洗礼を受けたドイツ人女性たちと邂逅し、富山妙子を知ることになった。裏返せば富山もまた、作品を「越境」させる過程で、韓国人女性たちとベルリンで再び出会ったのである。

日本の炭鉱離職者たちを追ってラテンアメリカへと越境した富山は、鉱山画家から「画家」となり、強制連行された朝鮮人坑夫を描くようになった。1980年代、ポストコロニアリズムの視点にフェミニズムを融合させた富山の作品「倒れた者への祈祷」、「はじけ鳳仙花」と「海の記憶」は、その意味を共有した同志たちを介し、ベルリンをはじめ、パリ、ロンドン、ニューヨークへと越境した。冷戦構造における「特需の思想」に抑圧された韓国の労働移民が多く暮らすドイツは「アイデンティティを韓国に移した」富山にとって特別な国であり、わけても韓国、日本、ドイツの女性たちが韓国民主化運

動をともに支え、「おたがいが国家を離れ人間同士としての交流をする」ベルリンは「どこよりも、居心地のよい場所だった」（富山、1989：31-32）。

1970年代後半、ドイツ国内の一少数民族集団として生存権を求めて闘った韓国移民たちは、1980年代に入ると韓国民主化運動を支援した。イ・ユジェは、そうした「超国家的な民主化運動は自国の独裁体制に対する挑戦であった」と同時に、移民事業をめぐる韓国政府の真意を見抜いていた在独韓国人たちは、「“派独”イデオロギー」を内面化しており、これが彼や彼女たちの自己表現に対し持続的に影響してきたと指摘する（¹⁰、2014：340-341）。たとえば、富山をヒンツペーターと並ぶ韓国民主化の恩人と慕う崔英淑氏（3章参照）の場合、彼女の言動を動機づけてきたのも、やはり「“派独”イデオロギー」だったのだろうか。それは富山が述べているように「国家を離れ」た意識によるものだったのか。このあたりの疑問に対しては、今後も引き続き探究していきたい。

6. おわりに

2005年、富山の〈炭鉱〉の絵は、ようやくルールにたどり着く。ルール大学社会学部長となっていた Ilse Lenz が、ルール大学図書館での展覧会をコーディネートしたのである。富山は書いている。長くなるが引用したい。

「ルール炭田はドイツの産業を支え、戦後は韓国からの移民労働者が多く働いていた。その後エネルギー源は石炭から石油に変わり、ルール炭田も閉鎖に追い込まれた。しかしルール炭鉱地帯は文化の拠点として再生をはかる。広大な炭鉱地帯を保存し、旧坑道には地下鉄を走らせ、炭坑設備は文化遺産として継承してゆく。

かつて多くの国からきた移民労働者が暮らしたその生活の跡は、炭鉱が刻んだ歴史のモニュメントとして、ルール大学の研究課題ともなるであろう。（略）ルール炭田を歴史の記憶として市民社会の中に導き入れることによって、歴史認識のコンセンサスをつくる。わたしは日本の炭鉱政策との違いを感じたのだ。なぜ日本の炭鉱労働組合は、近代史としての炭鉱の記録と、負の遺産としての戦争中の中国人、朝鮮人の強制労働の資料収集や研究のための公的な炭鉱資料博物館を建設できなかったのかと、悔やまれる。」（富山、2009：269-270）

2015年、軍艦島の世界遺産登録をめぐる、「中国人、朝鮮人の強制労働」という負の歴史を糊塗しようとする日本と、これに抗議する中国、韓国との間で、深い亀裂が刻まれた記憶がまだまだ生々しい現時点から見て、10年も前の著書の中で富山がすでに「日本の炭鉱政策」に欠落した「歴史認識のコンセンサス」を言い当てていたことに驚嘆する。

実際、本研究を遂行する過程で、筆者（金子）は、ルール大学ルール地方歴史館で進

行中のオーラル・ヒストリー・プロジェクト「Menschen im Bergbau (鉱山の人)」を知ることとなり、アーカイヴ長よりルール地方の日本人元炭鉱夫のインタビューを委託された。ドイツ人のみならず、各国出身の元炭鉱夫たちが語る各自のオーラル・ヒストリーは、撮影と編集を完了しだい、順次ネットに公開されている⁶⁾。

10年前に富山が記した、「かつて多くの国からきた移民労働者が暮らしたその生活の跡は、炭鉱が刻んだ歴史のモニュメントとして、ルール大学の研究課題ともなるであろう」という指摘の通りに、プロジェクトが進められていることにも驚かされる。「鉱山の人」アーカイヴには、まだ日本人のオーラル・ヒストリーは収録されていない。韓国人も2019年3月の現時点で1名のみである。インタビューの言語はドイツ語である必要はなく、母国語で語ってもらってかまわないという。むしろその方が語り手のあるがままの思いを引き出し、望ましいとさえ言うのである。こうしてそれぞれの語りに込められた出自も背景も異なる人々の存在じたいが、ひとり、ひとり、「炭鉱が刻んだ歴史のモニュメント」となっていく。

画家・富山妙子は在独日本人元坑夫とは出会わなかった。だが上記プロジェクトのコンセプトは、必然的に、互いに「対蹠地点」に位置していた「かつて多くの国からきた移民労働者」たちを再び出会うことになる。それは前記の引用文が示すように、富山が度重なる「越境」の経験を通じて育んだ歴史認識が、最終的にめざすイメージとも合致しているようである。本研究を通じて、図らずもその現場に身をもって立ち会うことができた僥倖に、心より感謝したい。

謝辞

本研究は、公益財団法人 JFE 21 世紀財団による 2016 年度「アジア歴史研究助成」の助成を受けて行なわれたものである。本報告書はその研究成果の一部である。

財団のご支援に対し、関係者各位には、記して厚く御礼申し上げます。

なお、助成により、すでに以下の成果が公刊されている。

- ① 真鍋祐子「シャーマンを生きる—富山妙子の画業に寄せて（前）」『あいだ』232、2017年4月
- ② 真鍋祐子「シャーマンを生きる—富山妙子の画業に寄せて（後）」『あいだ』233、2017年5月
- ③ 真鍋祐子「富山妙子画伯의 作品世界속 “무당” 모티브—植民地主義에서의 “한풀이” 를 위하여」『環東海地域の 오래된 現在』図書出版해토（ソウル）、2017年5月

【註】

- 1) 富山の著書にも「日中戦争がはじまって間もない1934（昭和9）年」との記述があり（富山、2009：202）、彼女が記憶違いをしていたと考えられる。日中戦争が始

- まるのは 1937 (昭和 12) 年である。
- 2) 李恩政 (ベルリン自由大学・教授) の未発表論文「「5・18」そして統一：ベルリン／ドイツにおける韓国民主化運動」(原文韓国語) による。
 - 3) 映画「タクシー運転手」(2017 年) のモデルとなったドイツ人記者ユルゲン・ヒンツペーター (1937～2016 年、当時・ドイツ公共放送 (ARD) 東京特派員) は 5 月 20～21 日、軍事封鎖されていた光州市内に潜入し、事件の惨状を収めたフィルムを密かに国外に持ち出し、東京からドイツの放送局に送った。彼の映像は 22 日の午後 8 時のニュースで放映され、翌日には他の国々でも流された。それによって情報統制下の光州で起きていたことを全世界が知ることとなり、イ・ユジェがいう「超国家的民主化運動」、すなわち国境を越えた韓国民主化運動支援の気運が強く促された。
 - 4) 岡村淳制作「富山妙子さんに聴く—西暦 2013 年 7 月 10 日」(未公開 DVD)
 - 5) ベルリンで面談した元看護師 K 氏は 1972 年に 28 歳で渡独した。韓国でも看護師として働き、結婚して一女をもうけたが、夫との暮らしが気づまりとなり、離れて生活する口実に「ドイツで働きたい」と頼んだところ、あっさり離婚を認めてもらえたという。ベルリンで生活の基盤を整えてから、韓国より住みやすいからと娘を呼び寄せた。K 氏が渡独した経緯は、文字通り「家父長制からの解放」をめざした「越境」という点で興味深い。
 - 6) 「鉱山の人」の URL アドレス <https://menschen-im-bergbau.de>

【引用文献】

- 富山妙子、1960、『炭坑夫と私』毎日新聞社
- 富山妙子、1964、『中南米ひとり旅』朝日新聞社
- 富山妙子、1989、『戦争責任を訴えるひとり旅—ロンドン・ベルリン・ニューヨーク』岩波ブックレット
- 富山妙子、2009、『アジアを抱く—画家人生 記憶と夢』岩波書店
- 針生一郎・金潤洙・富山妙子、2000、「座談会：現実のタブーに挑戦する民衆芸術—第三回光州ビエンナーレ・「芸術と人権」展をめぐる」『世界』10月号
- 富山妙子・真鍋祐子 (対談)、2010、「なぜ光州を語り、描き続けるのか—光州事件 30 周年の年に」『月刊百科』12月号、平凡社
- 金子毅、2003、『八幡製鉄所 職工たちの社会誌』草風館
- 菊地亮、2006、「『帝国』を追いかけて—富山妙子の仕事」『VOL』創刊号、以文社
- 坂元ひろ子、2018、「日本人画家富山妙子のアートにみる植民地主義と女性の身体」、坂元ひろ子教授講演『身体表象とジェンダー』、延世大学校近代韓国学研究所 HK⁺ 事業団・第 2 回海外学者招請フォーラム (於・延世大学校原州キャンパス)
- 徐潤雅、2016、「富山妙子の表現と 1970 年代の韓国：詩画集『深夜』とスライド「し

- ばられた手の祈り」を中心に、『待兼山論叢』50号日本学篇
 竹内好・鶴見俊輔、1971、「本当の被害者は誰なのか」『潮』142
 深田祐介、1984、『われら海を渡る』文春文庫
 本橋哲也、2005、『ポストコロニアリズム』岩波新書
 森廣正、2005、『ドイツで働いた日本人炭鉱労働者－歴史と現実』法律文化社
 Rebecca Jennison, 1996, " ' Postcolonial' Feminist Locations: The Art of
 Tomiyama Taeko and Shimada Yoshiko" , *U.S.-Japan Women' s Journal*
 Rebecca Jennison, 2003, " Remembering as Resistance: The 'Shaman' and the
 'Fox' in the Art of Tomiyama Taeko" , 『京都精華大学紀要』25
 강원혜 (カン・ウォンヘ) 、2003、「独逸政府의 在独韓国看護要員 強制帰国処置에
 反對하여 벌린 署名運動과 現在 在独韓国看護要員의 法的位置」『在独韓国女性
 모임－創立 25 周年記念文集』
 이유재 (イ・ユジェ) 、2014、「超国家的觀點에서 본 独逸韓人디아스포라」『歴史
 批評』110

注記

本報告書は、真鍋祐子と金子毅による共著である。
 各章の分担執筆は以下の通りである。

- | | |
|---------|------|
| 1、2 | 真鍋 |
| 3—1) | 金子 |
| 3—2) 3) | 真鍋 |
| 4 | 金子 |
| 5、6 | 共同執筆 |